12　「普通」「当たり前」に傷つくことも（性的マイノリティ）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、松岡はながお届けします。

福岡市を拠点に、性的マイノリティの情報発信や啓発活動をしているＮＰＯ法人「Ｒａｉｎｂｏｗ Ｓｏｕｐ」という団体があります。代表の五十嵐ゆりさんは、当事者が集まる交流会のサポートや講演会をしています。

周囲の人たちを明るく支える五十嵐さんですが、思春期には一人で悩みを抱えていました。

【五十嵐さん役】中学２年生のとき、気になる女の子がいました。その子に会えるとうれしくて、会えないとさびしい。そんな頃、学校の教科書に「思春期には異性を好きになるのが自然なこと」と書いてあるのを見て、ショックを受けたんです。同性を好きなのは異常なんだ、自分は気持ちが悪い人間なんだと思い込み、心から笑うことができなくなりました。

私は将来どうなるんだろう。ずっと一人ぼっちかもしれない。そんな気持ちに耐え切れず、中学３年生のある日、母親に「私、女の子が好きみたい」と打ち明けました。口から心臓

が飛び出しそうなくらい緊張したけれど、母親は「大丈夫。気にしなくていいよ」と受け止めてくれたのです。家族が心の拠りどころになってくれて、本当にありがたかったです。

それでも、外ではずっと隠してきたので、会社員時代はつらかったですね。当時、一緒に暮らしていた女性のことを、男性だと思われるように話していたため、プライベートの話題になるのが苦痛でした。つじつまを合わせる嘘をつくのが嫌になり、５年間で退職しました。

１０年前に当事者団体を立ち上げ、性的マイノリティの知識を深めたことで、「ＬＧＢＴは異常なことではない。個性なんだ」と思えるようになりました。人数は少なくても、世界中に一定数の仲間がいると知り、気持ちも楽になりました。

今でも、多くの当事者は誰にも言えず、打ち明けても拒絶され、生きづらさを抱えています。私たちは、「当たり前」や「普通」という言葉を何気なく使っていますが、時には人を傷つけることもあります。目の前の一人一人を、「そうだね。そういうこともあるよね」と受け止めていくことが、誰もが生きやすい社会をつくる第一歩になるのではないでしょうか。

（本文９０９字）